

聖書：ローマ7：1～6

説教題：律法から解放され

日時：2015年10月4日

ローマ書の7章に入ります。この章でパウロは「律法とクリスチャンの関係」について論じます。まず1節で彼はこう言います。「それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。——私は律法を知っている人々に言っているのです。——」この彼の言葉からすると、パウロに疑問を投げかけた人たちが持っていた意見はどのようなものだったと考えられるでしょう。それは、律法はクリスチャンに対して今でも権限を持っているという意見でしょう。パウロは6章14節後半でこう言いました。「あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。」ある人々にとって、このパウロの言葉は受け入れがたいものでした。特にユダヤ人になったつもりで考えると分かります。モーセの律法はユダヤ人の宝です。神の民イスラエルに与えられた特別な賜物です。ところがパウロは信者はもはやその下にはないと言います。これは律法は今や我々と関係ないということなのか。律法を軽んじたら人々に放縱の生活を勧めることになるのではないか。我々は気にせず罪を犯そう！となるのではないか。そこでパウロは前回の6章15～23節でまず、これは罪の生活を肯定しないということを述べました。恵みの下にあることは罪の生活と矛盾する！と。そしてパウロは7章でもう一度、律法の問題に戻って来るのです。

パウロがここで言いたいことは、律法はいつまでも人間に対して権限を持っているのではないということです。死んだ人に対してまで法的効力や拘束力は持っていない、と。その一例として2節3節で結婚関係のことを取り上げています。ここは説明を加える必要もないほどのことと思いますが、パウロが言いたいことは、伴侶の片方が死ねば、お互いの拘束関係は終わりになるということです。夫が生きている限りは、妻は夫のもとにあり、他の男の所に行く自由を持っていません。もしそうしたら姦淫の女として責められます。しかし夫が死んだら、女は夫に関する律法から解放され、新しい夫に結ばれることができます。これをもとにしてパウロは4

節で、そのようにあなたがたも律法に対してはすでに死んだ者であり、律法はあなたがたの上に権限を持っていないと言います。そしてクリスチャンは今や律法とはなく、よみがえられたキリストと結ばれていると言っているのです。

さて、鋭い人はこれを聞いて、何か腑に落ちないものを感じるかもしれません。その人はこう思います。「たとえがうまく噛み合っていないのではないか」と。確かにその通りです。2～3 節のたとえで、私たちは夫から解放された妻にたとえられています。そこで死んだのは夫です。夫の死によって妻が解放されています。ところが4 節で死んだと言われているのは私たちの方です。相手が死んでこちらが解放されるのではなく、こちらが死んでこちらが解放される。ここにたとえの混乱があるのではないかと。ということ。しかし一方で私たちはたとえたとえであって、あらゆる細部にまで渡って一致するようには最初から意図されていないことも考慮する必要があります。たとえばある一つの真理を浮き彫りにするために用いられるものであって、全部が対応するようには考えられていません。たとえば私たちは聖書で羊にたとえられています。それは私たちが羊のように足が短いとか、四つんばいで歩くとか、暖かい毛皮を持っているということをおうとしているのでもありません。こういう点を取り上げて、これではたとえが不適切だ、人間とうまく合致していない、と言うのはナンセンスでしょう。私たちが羊にたとえられているのは、羊飼いのような導き手を必要としているとか、自分勝手な道に進んで迷いやすいとか、意地っ張りな割には気が弱いとか、そういう一面について言っているのです。ですからここでもパウロは何を意図したのか、そのポイントを汲み取ることが大事でしょう。パウロが言いたいこと、それは片方が死ねば、その夫婦関係は終わりになるということです。それと同じように律法に対して死んだ私たちに対しては、律法はもう権限を持っていない。私たちは律法の拘束から解放されて、今やキリストに結ばれているということをおうは示そうとしたのです。

ここにクリスチャンが持つべきアイデンティティーがあります。それは以前は私たちは律法の下にあったが今は違うということです。ある人々はパウロのこのようなメッセージを疑問視して、私たちはなお律法の下になければならないと考えていました。律法から解放されているなどと言ったら、誰も良い行ないをしなくなる。

道徳が乱れてしまう、と。しかし律法の下にあることは何か良い結果を私たちにもたらしてくれるのでしょうか。これを考えるために今日のたとえに沿って、律法が自分の夫であるという状況を想定して見てください。私は常に律法というご主人と共に歩む妻であるという風に。それはどんな生活でしょう。それは第一に私たちの罪が常に断罪され続ける生活を意味します。律法は良いことをした者に祝福を宣言し、悪いことをした者に呪いを宣言しますから、私たちが正しく歩んでいるなら何も恐れることはありません。夫から常に誉められるでしょう。しかし現実の私たちは罪を犯して生きています。するとこの伴侶は律法に違反していることを示します。5章20節：「律法が入って来たのは違反が増し加わるためです」 4章15節：「律法は怒りを招くものであり」 お前はこれこれのことをした、このようなふさわしくない罪を犯した、と怒られ続ける生活です。これは現実にはきつい生活ではないでしょうか。私たちはそこから何とか立ち直りたい。夫である律法の基準にかなうように生活したいと思います。しかし第二に律法の特徴は私たちが律法を行なうための力までは与えてくれないということです。律法は私たちに良い道を示してはくれます。こっちへ進め！こっちの道に神の祝福がある！と。しかしそれができるようにと私たちを助けてくれることまではしない。しないと言うよりできないのです。律法はその点で無力なのです。そればかりではありません。パウロがここで最も言いたい3番目のことが5節にあります。「私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。」 ここで回心前の状態では数々の欲情が私たちのからだに働いていたと言われていますが、注目すべきはそれが「律法によって」と言われていることです。これは一体どういうことでしょうか？簡単に言えば、律法がこれこれをしてはいけませんよ、これは神の御心ではありませんよと示すと、私たちはそれを聞いて、それじゃそれを行なってみようではないか！という方向に突き動かされるということです。逆にこれこれを行ないなさいと肯定的に命じる律法を聞くと、それに逆らう反対の道を選ぼうとするということです。これは次回の8節、11節、13節により詳しく語られますので、そこでもう少し突っ込んで考えたいと思いますが、これは墮落の結果として人間が神に反逆する心を持っていることと関係します。そのため、神の戒めに接すると、その反対の道を行こうとする性質が私たちにはあった。その結果、律法は罪の内にある私たちを刺激し、より一層罪を行なうことへと駆り立てる道具に

さえなっていたということです。

たとえば現実問題として、性教育をどこまで学校や家庭で教えるべきかという議論があります。ある人々は様々な誘惑や危険から子どもたちを守るために正しい知識を早めに教えるべきだと言います。しかし今日の箇所によれば、正しい知識を教えたらうまく行くかと言うとそうは行かない。なぜなら人間はそれを知ったから正しい道に進むという風にはならないからです。むしろその反対のすべきでないことをしたらどんな具合になるのか！という方向にも駆り立てられるからです。その結果、教えられなければ進まなかったであろう悪い方向に興味を持ち、そちらの方に堕ちて行って取り返しがつかないことになるということもあるのです。このように正しい規準、律法は私たちを正しい歩みへ導くどころか、一層罪を犯す生活へと誘導し、励ますということをしてしまうのです。こういう私たちにとって律法の下にあることは助けにならないのです。常に断罪され、何ら助けの手を差し伸べてもらえないばかりか、むしろ一層の悪へと突っ走るきっかけになってしまう。

そんな私たちにとってのグッドニュースは、私たちは今やこの律法の下であえぐ状態から解放されたということです。律法はもう私たちに対して権限を持っていない。どうしてそんなことが起きたのでしょうか。それは律法に対して私たちが死んだからです。具体的には4節に「キリストのからだによって」とあります。イエス様は私たちのために律法の要求を全部満たして、身代わりに十字架上で死んでくださいました。そのキリストの死において私たちも律法に対して死んだのです。そして私たちは今や他の人、すなわち死者の中からよみがえった方キリストと結ばれています。その方と結ばれて、その方から豊かな恵みといのちを受けて生活する者へと導かれた。その結果は「神のために実を結ぶようになること」です。前回見た6章22節に「聖潔に至る実を得た」とありました。Iテサロニケ4章3節：「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。」復活のキリストが力を注いでくださって、私たちは神に喜ばれる実を結ぶことができるのです。またこの状態が6節では「御霊による新しい状態」と表現されています。キリストの祝福はすべて聖霊を通して私たちに注がれます。聖霊は私たちの内側に住んでくださり、内側からも私たちを支えてくださいます。これは古い文字の力とは違います。「古い文字」と

は、モーセの律法が2枚の板に文字で書かれたことを指しています。その文字だけでは私たちを本当に動かし、救うことはできません。この御霊にある生活については、この後の8章で詳しく記されます。その前にパウロは7章の残りの部分で、律法の下にあることはどんなに望みがない状態か、そしてそこから救われることはどんなに幸いなことかを語って行くのです。

以上の今日の箇所をまとめるなら、次の問いに私たちがどう答えるかに集約できるかと思います。すなわち、私たちは自分の日々の生活を誰を伴侶とする生活として考えているか。もし律法を自分の伴侶としているならどうでしょうか。それは先に見たように、断罪され続ける生活であり、何ら力を貸してもらえない生活であり、さらに一層の悪へと駆り立てられる生活となります。このように考えると、律法という主人を持つことは悲惨なことのよう思えて来るかもしれません。そしてまるで律法が悪であるかのように思うかもしれません。しかし決してそうではないのです。そのことが次回の箇所で語られます。12節に律法は聖なる者であり、良いものであるとあります。では伴侶が悪いのでなければ、誰が悪いのか。その答えも来週見ますが、それは私たち自身ということです。私たちは良いものの下にあるのに、救われないばかりか、益々の悲惨に落ちていくのです。そういう私たちなのです。しかしもしキリストを信じるなら、その人は律法の下から解放される。そして復活のイエス様と結ばれ、御霊の新しい力によって生きる者となります。人間の力によるのではなく、文字の力によるのではなく、御霊の力によってです。私たちはイエス様を信じた私は、今や復活のイエス様と結ばれていることを感謝し、なおこの方に私たちの方からもしっかりと結びつき、御霊の力によって生きることを求めたいと思います。その時、神のために実を結ぶ生活が導かれて行きます。自分を振り返ると、そんな実はまだまだどこにもないようにも思います。しかし聖書はキリストと結ばれた者には、必ずそのことが起こって行くことと約束しています。律法にはできないが、イエス様はそのように導いてくださる、と。私たちはその復活のイエス様に信頼し、この方に望みをもう一度置いて、神のために実を結ぶ歩みへと導かれて行きたいのです。